

会 長 挨 拶

竹村 はるみ

今期より会長を仰せつかりました竹村はるみです。エリザベス朝文学を主たる研究対象とする私は、17世紀英文学研究を掲げる本学会では何となく後ろめたい思いが常にあります。最近になってようやく、エリザベス一世の最晩年に関心を持ち始めたものの、なかなか17世紀まで達することができずにいるのが現状です。

にもかかわらず、この由緒ある学会の会長という大役をお引き受けした理由は、ひとえにここで出会った先生方への尽きぬ感謝の気持ちからです。自分を研究者として育ててくれたのは研究会や学会であると常々思っておりますが、特にこの17世紀英文学会と関西シェイクスピア研究会は、関西の双璧を成す組織で、大学院の最終学年の時に緊張の面持ちでこの2つの会の門を叩いたことは、私にとって研究者としての大事な一步となりました。会長という大役が無事に務まるのかという不安はございますが、自分がこれまで受けた学恩に報いる貴重な機会を与えて頂いたことに深く感謝致しております。

30年前に入会した当時、黒田健二郎先生、杉本龍太郎先生、藤井治彦先生がにこやかに談笑される17世紀英文学会は、（時に罵声も飛びかう強面で知られた関西シェイクスピア研究会とは対照的に）鷹揚な雰囲気には満ちていました。そこに流れていたのは、年齢や性別や出身大学の垣根はもちろん研究者としての実績の有無も超えて、一研究者として互いに敬意をもって啓発しあう姿勢でした。17世紀英文学会の例会での質疑応答が発言しやすく盛り上がるのは、こうした会の精神が今も息づいているからだと思っております。

組織の運営はある程度ルーティン化するものですが、昨今は教育の現場と同様、学会運営もいやおうなしに変化を迫られる時代となりました。複数の選択肢があると、合意を形成する難しさに直面することになりますが、同じ分野の研究を志す者同士の絆があれば、おのずと最善の道が見つかるのではないかという楽観的な信念がございませう。事務局の先生方のお力を借りながら、そして会員の皆様のご理解とご協力を仰ぎながら、誠心誠意務めて参りますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

1. 全国大会・総会について

今年度の全国大会（第15回大会）および総会は、**2026年9月12日（土）**に青山学院大学青山キャンパスにて開催予定しております。発表者は佐々木和貴氏（東北支部）、瀧澤英子氏（東京支部）、金崎八重氏（関西支部）の予定です。総会後には懇親会の開催を予定しております。ふるってご参加いただきますよう、よろしくお願いいたします。

2. 編集委員会からのお知らせ — 論集第22巻『十七世紀英文学とコミュニティ』について

既にHP、各支部ML等で周知しておりましたように、第22巻のテーマは『十七世紀英文学とコミュニティ』(Seventeenth-Century English Literature and Community) となりました。本巻では、「コミュニティ」という概念を手がかりに、十七世紀英文学を取り巻く多様な人間関係や結びつきのあり方を多角的に捉えることを目的としております。前巻から導入した執筆希望申告方式により、若手研究者からベテラン研究者まで、計25名の皆様より執筆希望をいただきました。今後は、執筆希望をいただいた方々から、**2027年3月31日**締め切りで原稿をお寄せいただき、**2027年8月30日**に第22巻を発刊する予定となっております。会員の皆様にはぜひ楽しみにお待ちいただければと思います。論集第22巻が刊行されましたあかつきには、次の3点について会員の皆様にご理解とご協力をお願いいたします。

1. 執筆者は、**各自5冊**のご購入をお願いいたします。
2. 執筆者以外の会員におかれましても、**各人1冊**のご購入をお願いいたします。あわせて、所属大学図書館でのご購入についても積極的にご検討ください。なお、執筆者の方には、5冊ご購入とは別に執筆料として**各自1万円**のご負担をお願いしております（学生会員は除く）。
3. **金星堂のテキスト**を可能な限りご採用くださいますようお願いいたします。

3. 会計報告（速報版）

2025年度の会計報告を以下に記します。会員の皆様には会費納入へのご協力をお願い申し上げます。

2025年度（2025年4月1日～2026年3月31日）

収入		支出	
前年度からの繰越し	1,396,391	通信・事務費（封筒・切手・硬貨料金）	25,007
		振込手数料	640
論集21号執筆料	180,000	全国大会会場費	28,500
会費収入 東北支部	48,000	論集21号学会負担分	400,000
東京支部	132,000	HP更新費用	33,000
関西支部	93,000	HP担当謝礼金（2年分）	20,000
郵便貯金利子	1,114	預り金（論集執筆料未精算返金分）	40,000
計	1,850,505	計	547,147

次年度繰越金 1,303,358 円 （2026年4月30日）

*支出の部の「預り金（論集執筆料未精算返金分）」は、物故会員の過剰納付分について、ご遺族への返金手続きが完了するまで一時的に学会で保管しているものです。

正式な会計監査付きの資料は総会資料としてあらためて配布いたします。

4. ホームページおよび X（旧 Twitter）のお知らせ

当学会のホームページ(HP) は金星堂のご協力のもとに学会 HP 委員が運営・管理しております。

<http://www.kinsei-do.co.jp/S17CEL/>

「会員による新刊情報」や「会員による最新研究情報」などの HP 掲載データは年 2 回更新します。原則として 4 月末に各支部事務局、11 月末にホームページ委員が、掲載データを取りまとめます。研究業績を内外に知らせる良い機会となりますので、最新データの提出にご協力をお願いいたします。

また、学会 X（旧 Twitter、十七世紀英文学会（公式）@S17CEL）ではホームページよりも早く最新情報を掲載しています。フォローおよび最新情報のご確認を随時お願いいたします。

教員公募情報受け付けおよびツイッター配信のお知らせ

学会 X（旧ツイッター）では、国公立私立の大学、短大、それに準じる教育・研究機関から当学会に寄せられた英語英文学関係専任職の公募情報を配信しております。情報をお寄せいただいた順に、大学の公募ホームページあるいは研究者人材データベース（JREC-IN）へのリンクを掲載いたします。掲載を希望される場合には、本部事務局宛てにメールにて応募締め切りとともにお知らせください。なお、ウェブサイトへのリンクがない場合は、PDF データを添付ファイルにてお送りください。

5. 2025 年度支部活動報告

東北支部 活動報告・発表要旨

2026 年 1 月 31 日		今年の 1 冊
2026 年 3 月 22 日	古河 美喜子	写本か刊本か —新版ヘリック全集の編者 Ruth Connolly の書誌学について—
2026 年 3 月 22 日	柴田 尚子	王政復古演劇にみる china と japan

写本か刊本か—新版ヘリック全集の編者 Ruth Connolly の書誌学について—

古河 美喜子

近年のロバート・ヘリック (Robert Herrick, 1591-1674) 研究においては、編者トム・ケイン (Tom Cain) 及びルース・コノリー (Ruth Connolly) による 2013 年の二巻本、オックスフォード大学出版局から上梓されたヘリック全集の新版が、今後のヘリック研究の可能性を広げる成果であろう。第二巻において作品に付された音楽（楽譜）が載せられる等、まさにソングライターであるヘリックにふさわしい新詩集

の試みもなされており、こうした詩の歌への変換、アダプテーションは、そこから派生する新しい解釈とも結びついてゆくものと思われる。

この新版全集の特徴としては、写本（手稿）と刊本（出版物）の異同を体系的に整理していること、一部の詩には系統図も付けられていること、またヘンリー・ローズ等による音楽付き写本も示されていることが挙げられ、伝統的なポラード（Alfred Pollard）版やマーティン（L.C. Martin）版などから一線を画し、評価されている。まさにソングライターであるヘリックにふさわしい新詩集の試みもなされているのである。全集を出版した後、編者のコノリーは、“New Approaches to the Work of Robert Herrick”（2009）を皮切りに写本と刊本の重層的関係について論文を立て続けに出している。17世紀詩歌の制作・読者文化を見直す道を拓くものとなった。ヘリックの詩が、30年間にわたって写本として流通した後、印刷版のために慎重にヘリック自身によって改訂と追加が行われた点に着目し、抒情詩を「社会的に対話的」なものとして扱うべきとし、ヘリックは詩が読まれる社会的文脈の変化に応じて詩を改変したり、音楽家たちと継続的に協力したり、読者の期待に適應するなど結果的に完璧な王党派としての信条や、友人・後援者・家族、「自身の偉大で良き基盤」を構成する者たちのアイデンティティを保護しようとする姿勢を通じて、コミュニティとの絆を繰り返し想起させていると論じる。個人的でありながら共同的な性質を持つ、ヘリック詩集の特性について強調すると共に、共和政下において王党派の絆を再構築しようとする試みとしての機能、この時代の写本と印刷、作者と読者層の相互作用についても併せて言及している。

本発表では、先ず批評のライン（マーカス、コイロ、スワン、ピュー）を示し、コノリーの論を援用しながら、「白い島、すなわち祝福されたものの国」（‘The white Island: or place of the Blest’）を新たな視点で再読することを試みた。最終的には、これまで継続的に取り組んできた17世紀イングランドの王党派詩人ロバート・ヘリックの抒情詩集『ヘスペリデーズ』（*Hesperides*, 1648）が持つ抒情的で芸術的な価値と社会的で政治的な価値の融合状況について考察を重ね、内乱期のイングランドという特異な時代性や政治的機能から作品に流れる王党派の詩想について明らかにすることを目的とした。

参考文献

- Cain, Tom., and Ruth Connolly. “Introduction: Herrick’s Communities of Manuscript and Print.” *Lords of Wine and Oile’: Community and Conviviality in the Poetry of Robert Herrick*. Edited by Tom Cain and Ruth Connolly. Oxford: Oxford UP, 2011, 1-24.
- Coiro, Ann Baynes. *Robert Herrick’s “Hesperides” and the Epigram Book Tradition*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1988.
- Connolly, Ruth. “New Approaches to the Work of Robert Herrick.” *Literature Compass*, vol.6, iss.6, 2009, 1177-1187.
- . “Editing Intention in the Manuscript Poetry of Robert Herrick.” *Studies in English Literature, 1500-1900*, vol.52, no.1, 2012, 69-84.
- Herrick, Robert. *The Complete Poetry of Robert Herrick*. Edited by Tom Cain and Ruth Connolly. Oxford: Oxford UP, 2013. 2 vols.

Marcus, Leah Sinanoglou. *The Politics of Mirth: Jonson, Herrick, Milton, Marvell, and the Defense of Old Holiday Pastimes*. Chicago: University of Chicago P, 1986.

Pugh, Syrithe. Herrick, *Fanshawe and the Politics of Intertextuality: Classical Literature and Seventeenth-Century Royalism*. Farnham: Ashgate, 2010.

Swann, Marjorie. *Curiosities and Texts: the Culture of Collecting in Early Modern England*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 2001.

王政復古演劇にみる china と japan

柴田 尚子

17世紀イングランドにおいて、アジア、ことに日本の影響は決して大きいとは言い難い。しかし、後のシノワズリやジャポニズムを見据えるならば、その萌芽はすでに17世紀後半に見られる。王政復古期演劇に登場する china と japan は、東アジアそのものへの関心というよりは、異国趣味や社会的威信を帯びた奢侈品としての役割を果たしている。本研究発表では、王政復古期の演劇に見られる china と japan に注目しながら、その意味について考察する。

ウィリアム・ウィッチャリー (William Wycherley, 1641-1715) の *The Country Wife* (1675年初演)では、いわゆる“china scene”において、china はホーナーとレディ・フィジェットの関係を隠す隠語として用いられる。ここでは china が性的含意を担うだけでなく、希少で高価な舶来品であると同時に、時間の経過とともに再生・修復されることから、以前に比べて流通しやすく模倣を通じて消費される商品としても位置づけられると考える。

これに対し、アフラ・ベーン (Aphra Behn, 1640-89) の *The City Heiress or, Sir Timothy Treat-all* (1682) には“the Japan-Cabinet”が、重要書類を保管する家具として登場するが、その書類は最終的に奪われる。ここでの japan は、舞台上では安定した東洋趣味としてのみならず、所有者の威信や欲望として消費される。1688年に出版された *A Treatise of Japaning and Varnishing* は、そのような既存の japan の潮流を体系化し、図案と技法を広く流布させた書物として位置づけられる。したがって、1682年の時点で劇中の“the Japan-Cabinet”が必ずしも輸入品であったとは限らず、すでに英国内で再生産されつつあったジャパニング製品であるという可能性も考えられる。

以上のように、王政復古期演劇における china と japan は、東アジアそのものの表象というより、アジア由来の奢侈品がイングランド社会に内包され、消費されていく過程であるとも考えられる。

主要参考文献

Behn, Aphra. *The City-Heiress: Or Sir Timothy Treat-all*, Kindle ed., Stage Door, 2016.

Degenhardt, Jane Hwang. “Cracking the Mysteries of “China”: China(ware) in the Early Modern Imagination.” *Studies in Philology*, vol. 110, no. 1, Winter 2013, pp.132-167.

Impey, Oliver, and Christiaan Jörg. *Japanese Export Lacquer: 1580-1850*. Amsterdam: Hotei Publishing, 2005.

Stalker, John and George Parker. *Treatise of Japaning and Varnishing*. Oxford, 1688. (ストーカー, ジョン, ジョージ・パーカー『漆への憧憬—ジャパニングと呼ばれた技法』井谷善恵訳 (里文出版, 2010))

Wycherley, William. *The Country Wife*, edited by James Ogden, Kindle ed., London: Methuen Drama, 2014.

鈴木 裕子 「イギリス化する「中国風」：名誉革命から 18 世紀半ばのイギリス家具に見るシノワズリ」『年報地域文化研究』(東京大学, 2014), pp. 41-67, <https://cir.nii.ac.jp/crid/1390572174554429184>. Accessed 22 March. 2026.

日高 薫『異国の表象—近世輸出漆器の想像力』(ブリュッケ, 2008)

東京支部 活動報告・発表要旨

2025 年 12 月 14 日	瀧澤 英子	「ロミオなんて dishclout」 — 「古い」のは誰か／何か—
2026 年 3 月 21 日	植月 恵一郎	ジョージ・ウィザーの蜂のエンブレムについて
2026 年 3 月 21 日	—	17 世紀研究 この一冊

「ロミオなんて dishclout」 — 「古い」のは誰か／何か—

瀧澤 英子

シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』第3幕5場において、乳母が放つ「ロミオなんて dishclout (古布)」という台詞は、追放処分となったロミオを、もはや価値を失った存在として貶めるための誹謗の用語として解釈されてきた。本発表では、この dishclout という言葉を、初期近代イングランドにおける物質文化の文脈から再検討し、時の経過とともに古び、新たなものと交換可能な状態にある対象を言い表す比喩として捉え直した。その上で、作品全体を覆う「古さ」のテーマ、ならびにそれが生む捻じれの構造と関連付けて論じた。まず、共時的な観点から dishclout の語彙的背景を考察した。16,7 世紀の生活史において繊維は貴重資源として扱われ、役割を終えた布製品は、古布として幾度も転用されるのみならず、最終的には製紙原料として再生される循環過程の中にあった。『じゃじゃ馬馴らし』を始めとするシェイクスピア作品における用例の分析にもとづくと、この語が単なる気まぐれに発された悪態というよりは、用途を変えつつ使い回される古布としての物質性に即して言及されている可能性が浮き彫りとなる。乳母の台詞は、ロミオがジュリエットにとって、役目を終え、次に取って代わられるべき過去の存在となったことを、物質的な「古さ」のイメージを借りて提示している。

続いて、この物質的な「古さ」と、作品内にみられる時間をめぐる不均衡構造との関連付けを試みた。劇中では、性急な若者たちと対照的に、乳母やロレンス修道士をはじめとする年長者たちは、身体的な「遅れ」や認識のタイムラグを伴う停滞として描かれる。また若者たちの口からは、年長者の引き起こす遅滞に向けた非難の声が頻繁に聞かれる。その一方で、「ロミオなんて dishclout」との乳母の言辞を「老いぼれのいまいまいしい言い草 (ancient damnation)」と撥ねつけたジュリエットが新たな支援者として頼ったのが、やはり年老いたロレンスであったように、若者たちもまた「古さ」の傘下にみずから回

帰する傾向がみられる。「古さ」を嫌悪しつつ、その実、みずからの「若さ」を燃料として古い因縁を再燃させる、あるいは「古き」ものに依存せざるを得ないという概念上の捻じれが露呈する。

こうした若者たちの抗いと依存の構図を踏まえれば、乳母の dishclout という一言は、循環し偏在する「古さ」の力学を示唆するものとして読むことができる。卑近な家事用品が帯びるイメージを出発点に、劇作品内における世代間の相克と悲劇の構造を、物質感覚と時間へのそれが交差する地点から再照射する試みを提示した。

BIBLIOGRAPHY

- Asuncion, Josep. *The Complete Book of Paper Making*. N.Y. Lark Books, 2003.
- Craig, Heidi. "Rags, Ragpickers, and Early Modern Papermaking," *Literature Compass*, 2019, 16.
<https://doi.org/10.1111/lic3.12523>
- "Dishclout." *Oxford English Dictionary*, 2nd ed., Oxford UP, 1989.
- Granville-Barker, Harley. *Prefaces to Shakespeare*. Princeton, NJ: Princeton UP, 1947.
- Heyworth, G. G. "Missing and Mending: Romeo and Juliet at Play in the Romance Chronotope." *The Yearbook of English Studies*, vol. 30, 2000, pp. 5–20. JSTOR. Accessed 1 Nov. 2025.
- Rodgers Albro, Sylvia. *Fabriano: City of Medieval and Renaissance Papermaking*. Delaware, Oak Knoll Press, 2016.
- Shakespeare, William. *Romeo and Juliet*. G. Blakemore Evans. ed. Cambridge: Cambridge UP, 1984.
- . *Romeo and Juliet*. G. Blakemore Evans. ed. Hester Lees-Jeffries. introd. Cambridge: Cambridge UP, 2023.
- . *Romeo and Juliet*. Hannah August, Francis X. Conor eds. Oxford: Oxford UP, 2024.
- . *Romeo and Juliet*. René Weis. ed. London: Bloomsbury Arden, 2012.
- Snyder, Susan. "Ideology and Feud in Romeo and Juliet." *Shakespearean Criticism*. Kathy D. Darrow, Jelena Krstovic, Michelle Lee eds. Vol. 51. Gale Cengage, 2000.
<<https://www.enotes.com/topics/romeo-and-juliet/criticism/romeo-and-juliet-vol-51/gender-and-society/susan-snyder-essay-date>> Accessed 5 Nov. 2025.
- Tilley, Morris Palmer. *A dictionary of the proverbs in England in the 16th and 17th centuries*. Ann Arbor: U of Michigan P, 1950.
- Vaughan, Henry. "The Book" *Silex Scintillans: Sacred Poems and Private Ejaculations*. London, 1655.

ジョージ・ウィザーの蜂のエンブレムについて

植月 恵一郎

ウィザー (George Wither, 1588-1667) の『古今エンブレム集』 (*A Collection of Emblemes, Ancient and Moderne*, 1635) の〈蜂〉をモチーフとした詩3篇 (1巻23歌、2巻28歌、4巻42歌) について、各々その特徴を述べた。この『エンブレム集』では、つねにすでに〈蜂〉は単なる昆虫ではなく、勤勉、労働者、社会的秩序等を象徴する重要なモチーフとして描かれている。

ウィザーの最初の詩（1巻23歌）では、〈蜂〉に刺される危険を冒してまで蜜を盗もうとする熊の姿を、自らの欲望（肉欲）を満たすためにリスクを顧みない「享乐的な人間」になぞらえている。この詩の教訓は、「悪に走る者がそれほどの情熱と勇気を持つのなら、善を志す者が困難に屈していいはずがない」というメッセージにある。美德を手に入れるにしても、蜂の針や蜜を手に入れるまでの進路を阻む棘に伴う「痛み」を乗り越えねばならないが、その苦難の先には、肉体的な快楽を遥かに凌ぐ精神的な報酬が待っていると説く。最終的には、やはり、キリスト教的メッセージ、磔にも相当する苦悩を耐え抜くことで得られる魂の喜びこそが真に価値あるものだと結論づけている。併せて the bear and the bees の文学的伝統についても言及した。

次の詩（2巻28歌）では、兜と蜂のテーマを扱っており、兜は戦争のメトニミーであり、〈蜂〉は平和の象徴となる。つまり、戦時に使用した兜という武具が、人間に有益な蜂蜜と蜜蝋をもたらす〈蜂〉の巣作りに平和利用されていることを暗示している。先行する詩では、後にヘミングウェイ（Ernest Hemingway）の『武器よさらば』（*A Farewell to Arms*, 1929）のタイトルになったと言われる、ピール（George Peele）の『武器よさらば』（*A Farewell to Arms*, 1590）の一節のエコーが認められた。

三つ目の詩（4巻42歌）では、〈蜂〉の生態を通じて人間社会の不条理を批判している。〈蜂〉は冬の飢えを凌ぐために一生懸命働くが、その「優れた奉仕」への報酬は、皮肉にも殺されるか、棲家を奪われ、追放されるか等である。結局、〈権力〉への皮肉、言い換えれば、どんなに忠実に働いても、最後には報われない労働者の運命、共同体の収奪の不条理を〈蜂〉の運命に重ねている。

ウィザーの〈蜂〉とは、自然界の知恵が人間の共同体で具現された存在に他ならない。その三篇の〈蜂〉の詩では、〈蜂〉の生態を通じて「個人の規律」「社会の調和」「信仰の勝利」といった、ルネサンス期からバロック期にかけて、共同体でも重要視された道徳的価値観を読者に教訓的に示していた。

【参考資料】

Butler, Charles. *The Feminine Monarchie*. Da Capo Press, 1969.

Connor, Steven. *Fly*. Reaktion, 2006.

Daly, Peter Maurice and Young, Alan R. *The Emblems of Wither & Rollenhagen*. Studiolum, 2002.

Grinnell, Richard. "Shakespeare's Keeping of Bees." *ISLE: Interdisciplinary Studies in Literature and Environment*, vol. 23, no. 4, November 2016, pp. 835–854.

Hawkins, Henry. *Partheneia Sacra*. Scholar Press, 1993.

Mandeville, Bernard. *The Fable of the Bees, or, Private Vices, Publick Benefits*. Ed. by F. B. Kaye. OUP, 1957. v. 1, v. 2. 『新訳蜂の寓話——私悪は公益なり』バーナード・マンデヴィル著、鈴木信雄訳、日本経済評論社、2019年、(正)、『新訳蜂の寓話——私悪は公益なり』バーナード・マンデヴィル著、鈴木信雄訳、日本経済評論社、2024年、(続)。

Preston, Claire. *Bee*. Reaktion, 2006.

Remnant, Richard. *A Discourse or Historie of Bees (1637)*. Eebo Editions, Proquest, 2010.

Wither, George. *A Collection of Emblemes, Ancient and Moderne (1635)*. U of South Carolina P, 1975.

植月恵一郎「17 世紀イギリスの〈蜂〉——ジョージ・ウィザーを中心に」、『日本大学芸術学部 日本大学研究員研究報告書』第 24 巻、68-73 頁、2025 年。

渡辺孝『ミツバチの文化史』筑摩書房、1994 年。

——『ミツバチの文学誌』筑摩書房、1997 年。

17 世紀研究 この 1 冊

4 回目となった「17 世紀研究 この 1 冊」では、同日の植月恵一郎氏による研究発表において、英文学研究における生成 AI の活用の可能性についての言及があったことを受け、研究・教育の現場での ChatGPT 等の生成 AI 利用の現状についての議論があった。具体的な問題や、便利な活用法、それらを論じた最近の書籍の紹介などがなされた。「17 世紀研究」という観点からはやや番外編的なものであったが、デジタル人文学の立場からの近年の研究書も紹介され、情報交換の場として非常に有益であった。(文責：伊澤高志)

関西支部 活動報告・発表要旨

2025 年 6 月 28 日	坂本 晃平	“Pity the tale of me”： 悲劇的自己提示としてのアストロフェルの求愛
2025 年 12 月 21 日	吉中 孝志	天国か地獄か、それが問題だ。 ——初期近代の視覚芸術と英文学——
2026 年 3 月 15 日	円浄 ゆり	初期近代コモンプレイス・ブック文化における『妖精の女王』第 1 巻～第 2 巻

“Pity the tale of me”：悲劇的自己提示としてのアストロフェルの求愛

坂本 晃平

フィリップ・シドニーによる連作ソネット集『アストロフェルとステラ』(1591)における「絶望」は、従来アストロフェルの情欲の挫折として読まれてきた。それに対し本発表は、108 番を精読した上で、アストロフェルの語る「絶望」を戦略的に演じられたものとして読み直したものである。ソネット 1 番に仕込まれたアストロフェルの苦悩がステラからの愛につながるというロジック、ソネット 45 番における“I am not I, pity the tale of me”という自己虚構化、およびナッシュが初版に施した序文に演劇的メタファーが見られること、これらもその傍証である。その上で、拒絶場面を描くソング 4 番・8 番・11 番の比較分析を通じ、形式的不完全性を抱えるソング 8 番のステラの拒絶はアストロフェルの空想的理想化の中でなされたということ、一方ステラ自身の声が聞かれる 11 番における彼女の声は、彼女の拒絶の動機は彼女が貞節であるからというよりも夫への恐怖であることを論じた。つまり『アストロフェ

ルとステラ』とは、ステラが貞節であると信じたがための絶望を演じるアストロフェルが、そうすることによって逆説的にステラに対する求愛を続けている、未完のソネット連作なのである。

引用・参考文献

- Keena, Justin. "Sidney's Sun Sonnets: Solar Imagery in *Astrophil and Stella*." *Sidney Journal*, vol. 37, no. 1–2, 2019, pp. 151–157.
- Lanham, Richard A. "Astrophil and Stella: Pure and Impure Persuasion." *English Literary Renaissance*, vol. 2, no. 1, 1972, pp. 100–115.
- Lewis, C. T., and C. Short. *A Latin Dictionary*. Oxford Clarendon P., 1879.
- Nashe, Thomas. *The Works of Thomas Nashe*, vol. III. Edited by Ronald Brunlees McKerrow. Sidgwick & Jackson, 1910.
- Ovid. *Fasti I: A Commentary*. Edited by Steven J. Green. Brill, 2004.
- Regan, Mariann S. "Astrophil: Full of Desire, Emptie of Wit." *English Language Notes*, vol. 14, no. 4, 1977, pp. 251–256.
- Sidney, Sir Philip. *The Major Works*. Edited by Katherine Duncan-Jones. Oxford UP, 1989.
- . *The Poems of Sir Philip Sidney*. Edited by William A. Ringler, Jr. Oxford UP, 1962.
- Sinfield, Alan. "Sexual Puns in *Astrophil and Stella*." *Essays in Criticism*, vol. 24, no. 4, 1974, pp. 341–355.
- Williams, Gordon. *Shakespeare's Sexual Language: A Glossary*. Continuum, 1997.
- Young, Richard B. "English Petrarke: A Study of Sidney's *Astrophel and Stella*." *Three Studies in the Renaissance: Sidney, Johnson, Milton*. Yale UP, 1958, pp. 1–88.
- 岩崎宗治『薇薄の託人たち——英国ルネッサンス・ソネットを読む』国文社、2012年。
- 岩永弘人『ペトラルキズムのありか——エリザベス朝恋愛ソネット論』音羽書房鶴見書店、2010年。
- オウィディウス『祭暦』高橋宏幸訳、国文社、1994年。
- 大塚定徳・村里好促『シドニーの詩集・詩論・牧歌劇』大阪教育図書、2016年。
- クルツィウス、エルンスト・ローベルト『ヨーロッパ文学とラテン中世』南大路振一・岐本通夫・中村善也訳、みすず書房、1971年（原著1948年）。
- シドニー、フィリップ『シドニーの詩集・詩論・牧歌劇』大塚定徳・村里好促訳、大阪教育図書、2016年。
- プラトン『パイドロス』藤沢令夫訳、岩波書店、1974年。

天国か地獄か、それが問題だ。——初期近代の視覚芸術と英文学——

吉中 孝志

※ 発表者の都合により、要旨・参考文献は非公開。

本発表では三部構成をとり、第一部は初期近代コモンプレイス・ブック文化とエドモンド・スペンサー (Edmund Spenser, c. 1552-1599) の読者教育の関連性について論じ、第二部では『妖精の女王』(*The Faerie Queene*) 第一巻および第二巻におけるスペンサーのコモンプレイス使用について分析した。つづく第三部では『妖精の女王』がコモンプレイス文化でいかに受容されていたかを検討するため、印刷版コモンプレイス・ブック『イングランド詩句集』(*Englands Parnassus*, 1600) における、『妖精の女王』から抜き出されたコモンプレイスについて論じた。

第一部では、コモンプレイス・ブック学習法を確立したエラスムスが効率的な学習システムの提示に重きを置いているのに対し、スペンサーの師であるリチャード・マルカスター (Richard Mulcaster, c. 1531-1611) は、コモンプレイス・ブック学習の道徳的効果を強調している点を指摘した。スペンサーが論じる『妖精の女王』における読者教育とは、読者が『妖精の女王』を歴史物語として楽しみ、読者自らが物語の中から教訓を導き出すという手法であるが、この物語から導き出された教訓は、コモンプレイスとして抜粋・収集することが期待されていたと考える。

第二部では、人徳を示すに最もふさわしい人物とされるアーサー王子が、第一巻・第二巻ではそのコモンプレイスの扱いにおいても巧妙である点を指摘した。第一巻ではアーサー王子が落胆するウーナを説得する場面でコモンプレイスが多用される (I.vii.40-42)。聞き手であるウーナがアーサー王子によっていかに説得されたのかを読者に提示することで、コモンプレイスを用いたスピーチの修辭的・道徳的説得性が全面に押し出されている。第二巻では気絶したガイアンが異教徒の騎士に襲われそうになっていた場面にアーサー王子が登場する (II.viii.25-26)。アーサー王子は異教徒を説得できず、結果、武力で相手を制圧することになるが、この場面で用いられるコモンプレイスは、アーサー王子が異教徒と戦うことを肯定するための説得材料として利用されている。

第三部では、初期近代読者の一人、ロバート・アロット (Robert Allott) の印刷版コモンプレイス・ブック『イングランド詩句集』において、特に第二巻の主題「節制」(temperance) の引用の仕方を論じた (ちなみに第一巻主題は未掲載)。アロットは「節制」が言及されている一節を無条件に引用しているわけではなく、利用価値の高い道徳的一節を恣意的に選別している。興味深い点は、「節制」の項目に「克己」(continenence) についての一節が引用されている点である。これはスペンサーが「克己」と「節制」を互換可能な語として使用していたためであり、アロットはその語義に従い、この一節を「節制」項目に振り分けている。アロットの実践例は、コモンプレイス・ブックがただの暗記帳ではなく、読者が物語内容を理解・解釈するための場としても活用されていたことを示している。

Bibliography

Allott, Robert. *Englands Parnassus: OR The choysiest Flowers of our Moderne Poets, with their Poeticall comparisons. Descriptions of Bewties, Personages, Castles, Pallaces, Mountaines, Groues, Seas, Springs, Riuers, &c. Whereunto are annexed other various discourses, both pleasaunt and profitable*. Printed for N. Ling, C. Burby and T. Hayes, 1600, *ProQuest (Early English Books Online)*,

- <https://www.proquest.com/books/englands-parmassus-choyset-flowers-our-moderne/docview/2240885478/se-2>.
- . *Englands Parnassus: Compiled by Robert Allot, 1600: Edited from the Original Text in the Bodleian Library and Composed with the Two Copies in the British Museum*. Edited by Charles Crawford, Clarendon P, 1913.
- . *Wits Theater of the Little World*. Printed for N. Ling, 1599, *ProQuest (Early English Books Online)*, <https://www.proquest.com/books/vvits-theater-little-world/docview/2240855923/se-2>.
- Carscallen, J. 'Temperance.' *The Spenser Encyclopedia*, edited by A. C. Hamilton et al., U of Toronto P, 1990, pp. 680–2.
- 'Commonplace, N. (2) & Adj.' *Oxford English Dictionary*, Oxford UP, December 2025, <https://doi.org/10.1093/OED/5330278595>.
- Crane, Mary Thomas. *Framing Authority: Sayings, Self, and Society in Sixteenth-Century England*. Princeton UP, 1993.
- 'Florilegium, N., Etymology.' *Oxford English Dictionary*, Oxford UP, March 2024, <https://doi.org/10.1093/OED/1040348007>.
- 'Flower, N. (1), Sense 6.d.' *Oxford English Dictionary*, Oxford UP, September 2025, <https://doi.org/10.1093/OED/6571572039>.
- Grogan, Jane. *Exemplary Spenser: Visual and Poetic Pedagogy in 'The Faerie Queene'*. Ashgate, 2009.
- Hamilton, A. C. *The Structure of Allegory in 'The Faerie Queene.'* Clarendon P, 1961.
- Heale, Elizabeth. *The Faerie Queene: A Reader's Guide*. 2nd ed. Cambridge UP, 1999.
- Marotti, Arthur F. 'Allott, Robert (fl. 1599–1600), literary compiler.' *Oxford Dictionary of National Biography*, Oxford UP, 28 September 2006, <https://doi.org/10.1093/ref:odnb/413>.
- Moss, Anne. *Printed Commonplace-Books and the Structuring of Renaissance Thought*. Clarendon P, 1996.
- Osgood, Charles Grosvenor. *A Concordance to the Poems of Edmund Spenser*. Peter Smith, 1963.
- 'Parnassus, N., Sense 1.b.' *Oxford English Dictionary*, Oxford UP, June 2025, <https://doi.org/10.1093/OED/4443015675>.
- Plutarch. *The Lives of Noble Grecians and Romanes compared together by that graue learned philosopher and historiographer, Plutarke of Chaeronea: translated out of Greeke into French by Iames Amyot, and out of French into Englishe, by Thomas North*. London, printed by Thomas Vautroullier and John Wight, 1579, *Early English Books Online*, [proquest.com/books/lives-noble-grecians-roman-es-compared-together/docview/2240891931/se-2?accountid=14182](https://www.proquest.com/books/lives-noble-grecians-roman-es-compared-together/docview/2240891931/se-2?accountid=14182).
- Smith, C. G. *Spenser's Proverb Lore: Special Reference to His Use of the Sententiae of Leonard Culman and Publilius Syrus*. Harvard UP, 1970.
- Spenser, Edmund. *The Faerie Queene*. Gen. ed. A. C. Hamilton. Rev. 2nd ed. Pearson, 2007.
- Weatherby, Harold L. 'Spenser's Legend of 'Εγκράτεια.' *Studies in Philology*, vol. 93, spring 1996, no. 2, pp. 207–17. *JSTOR*, www.jstor.org/stable/4174546.
- 円浄ゆり「循環するコモンプレイス—初期近代読書文化と『妖精の女王』第一巻」、東雅夫・下楠昌哉編『幻想と怪奇の英文学 V—関西疾風編』、春風社、2025年、112-36頁。

---、「ロバート・アロットの印刷版コモンプレイス・ブックにおける『妖精の女王』第2巻の「節制」理解」、『同志社大学英語英文学研究』108号2026年、23-49頁。
スペンサー、エドモンド『妖精の女王I・II』、和田勇一・福田昇八訳 筑摩書房、2005年。

6. 担当

- * 本部事務局：笹川 渉
- * 本部会計：大久保 友博
- * 東北支部事務局：川田 潤
- * 東京支部事務局：伊澤 高志
- * 関西支部事務局：廣野 允紀
- * 学会ホームページ委員：柴田 尚子

十七世紀英文学会規約

(名称)

1 本会は十七世紀英文学会と称する。

(目的)

2 本会は十七世紀英文学の研究を促進し、あわせて会員相互の連絡をはかることを目的とする。

(会の活動)

3 本会に本部と支部を置く。各支部は年数回の談話会等を開いて会員の発表・報告を聞き、研究情報等を交換する。

(2) 本部は総会を開いて重要事項を決定すると共に「ニューズレター」の編集刊行をする。

(3) 各支部は相互交流のために、年一回、談話会等に他支部所属会員を招聘することができる。その際には、本部会計より旅費（一律2万円）を補助するものとする。

(会員)

4 入会希望者は、各支部または本部に申し込んで会員となることができる。

(会長)

5 本会に会長をおく。

(2) 会長は会員の互選により総会で決定する。

(3) 会長の任期は2年とする。再任は妨げないが、再任は1回限りとする。

(顧問)

6 本会に顧問をおくことがある。

(2) 顧問は会員の総意により総会において委嘱する。

(組織および会の運営)

7 本会は会長の他に次の役員をおく。

本部幹事若干名 支部幹事各2名

編集顧問 編集委員若干名

会計監査2名 ホームページ委員1名

- (2) 本部幹事は会員の互選により総会で決定し、支部幹事と合議の上で本会の運営にあたる。
- (3) 支部幹事は各支部で選出し、本部に報告する。支部幹事は支部の運営の他に本部との連絡にあたる。
なお、本部幹事と支部幹事が重複することは差支えない。
- (4) 編集顧問は編集委員会が委嘱する。
- (5) 編集委員は、当分の間、各支部より2名選出するが、東京支部は3名とする。編集委員は編集会議を開き、「論集」の編集にあたる。なお、「論集」編集規定は別に定める。
- (6) ホームページ委員は学会ホームページの管理・運営にあたる。

(会計)

- 8 本学会の経費は会費、寄付金その他の収入をもってこれにあてる。
 - (2) 会費は年額、本部会費3,000円、各支部会費（東京支部500円（学生会員を除く）、関西支部1,000円（学生会員を除く））とし、あわせて支部に納入する。本部会費3,000円は各支部により本部へ送付するものとする。
 - (3) 本部会計の決算報告は翌年度の総会において行なう。
 - (4) 会計年度は4月1日に始まり、翌年3月31日までとする。
 - (5) 本部会計は本部幹事がこれを統括し、会計監査がこれを監査する。

(規約の発効)

- 9 本規約は1984年5月12日より発効する。

(規約の改正)

- 10 本規約は改正の要が生じた時は総会においてはかる。

付則 本部所在地

本部の所在地は次のとおりである。

〒150-8366 東京都渋谷区渋谷4-4-25 青山学院大学文学部 G1008笹川研究室内

1988年5月21日一部改正／1989年5月20日一部改正／1996年5月25日一部改正／2010年5月29日一部改正／2013年5月24日一部改正／2017年4月1日一部改正／2018年4月1日一部改正／2018年9月8日一部改正／2022年9月18日一部改正／2023年9月16日一部改正